

難波西鶴と

海の道

【74】

森田 雅也

前回の『好色一代男』『博多小女郎』の話の際に、「袖の湊」という地名がでてきました。大坂は、流通ルートの集積拠点として「天下の台所」と呼ばれ、繁盛しましたが、特に九州とは海の道で強く結ばれていました。

そのため、難波の西鶴にもたらされた情報量も多かったでしょう。西鶴作品に九州の話が多いことは、ここまで述べてきました。古来、九州における海の道において、博多は重要な地でしたが、博多の「袖の湊」

は、すでにそのにぎわいを失っていました。

『国史大辞典』の「博多」の項によれば、「この時期(11世紀後半から12世紀前半)にはすでに博多を拠点とする宋商(博多綱首)が数多く集住し、鎌倉時代に入ると、博多の代表的な禅寺を相ついで建立し維持しつづけた。平安時代末期には今津(福岡市西区)も開発され国際貿易港となる。平清盛が「袖湊」を整備して対宋貿易の根拠としたといわれ、博多は平氏の対外貿易上重要視しなくてはならぬが、「袖湊」は歌語的表現で、その実体は把握し

にくい。

と「袖の湊」は伝説の博多国際港であった。『日本国語大辞典』の「袖湊」の項目には、「古く、博多(福岡市博多区)にあった港。那珂川の旧下流域を東西に通じていた入海で、唐船が入港してにぎわったが、御笠川や那珂川の土砂がたまり、慶長年間(1596～1615年)に埋没した。』として、『夫木和歌抄』『延慶3(1310)年頃成立』にある「まつらがた。袖のみなど」に「こぎよせんもろこしがねの」とまりもとめは「藤原有家」の例を挙げています。他にも歌枕として詠まれた用例は多いですが、博多とは限定しづらい。「衣の袖が悲しみの涙にぬれているのを浦にたとえていう語(『日本国語大辞典』)」という普通名詞として用いられたケースもあります。

伝説の博多国際港「袖の湊」

西鶴は、筑前の枕詞のよみ「袖の湊」や「袖の浦」という語をよく用いています。『西鶴名残の友』(元禄8(1695)年刊)においても、「袖の湊のふる里思ふ筑前の侍ひ東武(江戸)のつとめにくたられしが」と、うらぶれた筑前の武士の故郷として用いられているものの、話の舞台ではありません。

『本朝二十不孝』(貞享3(1686)年刊)では、「露に、涙に、同袖の湊、筑前の国、福岡の町はづれ」には、普通名詞と固有名詞とをわけて用いています。が、舞台は筑前です。

最もその地にこだわって用いているのが、『西鶴諸国ばなし』(貞享2(1685)年刊)巻三の四「紫女」です。これは怪談。次回にて。

(関西学院大学文学部文
学言語学科教授)

実体把握しにくかった